（注８）伊勢崎藩領、天明三年当時藩主は酒井忠温（さかいただはる）

（注９）「川島村絵図」　渋川市教育委員会所蔵　渋川市北橘歴史資料館企画展「浅間山大噴火―泥流に流された村―」展示図録　２０２１

（注10）「注２」第Ⅲ巻ｐ１１２～１１５

（注11）「注２」Ⅳ巻ｐ３４０、れいせん川原は前橋城の南端

（注12）「中村遺跡」（渋川市教育委員会発掘調査報告書11）　渋川市教育委員会　１９８６

（注13）渋川市指定天然記念物

（注14）中村区有文書　「渋川市誌第５巻歴史資料編　口絵」　渋川市誌編さん委員会　１９８９

（注15）「注２」第Ⅱ巻ｐ２９２～ｐ３０２

（注16）現前橋市前橋陣屋の南にあたり当時は実政関所が設けられていた。「実政」の標記は原本に従い、本文・地図では「実政」を用いた。

（注17）小諸市美斉津洋夫氏蔵　やんば天明泥流ミュージアム保管「やんば天明泥流ミュージアム常設展示図録」２０２１

（注18）現群馬県吾妻郡中之条町

当報告作成にあたり、渋川市教育委員会星野諒太氏、川島村名主文書の整理・解読に取り組んでいる唐澤保之氏に多大なるご支援とご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

（ふるさわ　かつゆき　長野原町やんば天明泥流ミュージアム館長）

の人や馬が難を逃れた記録はこの地区での被害と避難の様子を生々しく伝えている。利根川右岸の現在の関越自動車道渋川伊香保ＩＣ周辺の村落である。関越自動車道建設に伴う発掘調査では、四ｍにも及ぶ泥流の下から青々とした大豆や、桑、昆虫をはじめ多くの遺物がみつかった地域である。（注12）また、この時見つかった幅一〇ｍ、高さ四ｍをこえる溶岩塊も現在、渋川市武道館の駐車場一角に移設保存されている（注13）。この付近は利根川の川幅が広く、左岸はがけで泥流の行き場がなく、榛名山西斜面の緩やかに傾斜している中村を襲った泥流が川越藩領だけでも村高三一七石の内四分の三以上にあたる二四五石余を埋め尽くした。この状況は中村区有文書の「中村泥入り絵図」に描かれている（注14）。

　このように大きな被害を受けた中村で川島村の一〇人もの人が救助されたのは川幅が広くゆるやかな傾斜地を泥流が比較的緩やかに広がっていったこと、多くの人が危険を顧みず村人の救助にあたり、救出された人のなかに川島村の人も混じっていたことが予想される。また、救助された人が隣村の石原村や渋川村の村民の世話になったことは救出はしたものの自身も被災し世話ができなかった中村の村人がいたことがわかる。

　当時、高崎在住の女性俳人羽鳥一紅が記した「文月浅間記」（注15）には前橋の実政（注16）付近の様子として、助けを求める被災者に網を投げたり、長い縄を投げたりして何とかして助けようとする人々の様子が記され、他にもいくつかの資料に、泥流に踏み込むことが出来なかったため、竹で筏を組んで救出に向かったことが記されている。また、「浅間山焼昇之記」（注17）には挿絵の中に幸手宿（現埼玉県幸手市）付近を流れる権現堂川の様子があり、竹竿をだして救助しようとする人、船を出すために友綱を解こうとする人、着物を脱ぎ捨てて川に入ろうとする人の姿、声を出して勇気づける人がえがかれている。中村をはじめ吾妻川や利根川、現在の江戸川のいたる所で川沿いの村人のこのような救助活動があり、泥流に流された人たちが助け出されたのであろう。

終わりに

　救出された川島村の人をテーマに被災者の救出についてのべてきたが、二つの史料に記載されている一九人は下流で救助され生還したことが確実である。

　これまで「史料集成」所載の史料で救出された人のことが記載されているのは、吾妻川の川幅が広がりやや流れが緩やかになる現在の中之条町（注18）付近より下流の村であるが、一村での生還者としては川島村の一九人が最大である。また、川島村のほとんどの人が川幅が広がり流れが緩やかになった利根川合流地点より下流で救出されている。

　「史料集成」所載の古記録の中には被災者を救助したくても泥流が熱くて踏み込めなかったと記されているものもある。泥流の中には巨大な溶岩塊が含まれその周辺が高温になっていたと考えられるが、下流で助けられた人がいたことからわかることは、泥流のほとんどの部分が常温であったことである。

　冒頭でも述べたが、救出された人々は「史料集成」所載の史料だけでも他にも記載されている。しかし、同じ記事が異なる村のこととして記載されたり、「風聞」または「聞き書き」として記載されているものがあるので、複数の資料の比較研究が必要である。救出された人の調査研究として、確実な史料が残された川島村を取り上げたが、今後も他の村での救出された人の事例、被災者の救出に取り組んだ村や人の記録について調査研究を継続して行きたいと考えている。

（注1）この土砂災害については研究者によって異なる用語を用いているが、当館では現浅間園付近の発生地点から吾妻川流入までを「鎌原土石なだれ」、吾妻川流入後を「天明泥流」としている。
（注2）「噴火の土砂洪水災害―天明の浅間焼けと鎌原土石なだれ―」　井上公夫　２００９　古今書院
（注3）「浅間山天明噴火史料集成Ⅰ～Ⅴ」　萩原進　１９８５～１９９５　群馬県文化事業振興会
（注4）千葉県柏市個人蔵、「注2」第Ⅱ巻Ｐ３３２～３４８
（注5）渋川市教育委員会所蔵　渋川市北橘歴史資料館企画展「浅間山大噴火―泥流に流された村―」展示図録　２０２１
（注6）「川島久保内・馬場遺跡発掘調査報告書」（渋川市発掘調査報告書62）　渋川市教育委員会　１９９８
（注7）川越藩松平家、寛延2年（１７４９）姫路から松平朝矩が前橋に移封になったが、前橋城が利根川に侵食され危険になったため明和5年（１７６８）居城を川越に移し川越藩となり、明和6年前橋城は破却され陣屋が置かれていた。天明三年時の藩主は松平直恒（まつだいらなおつね）

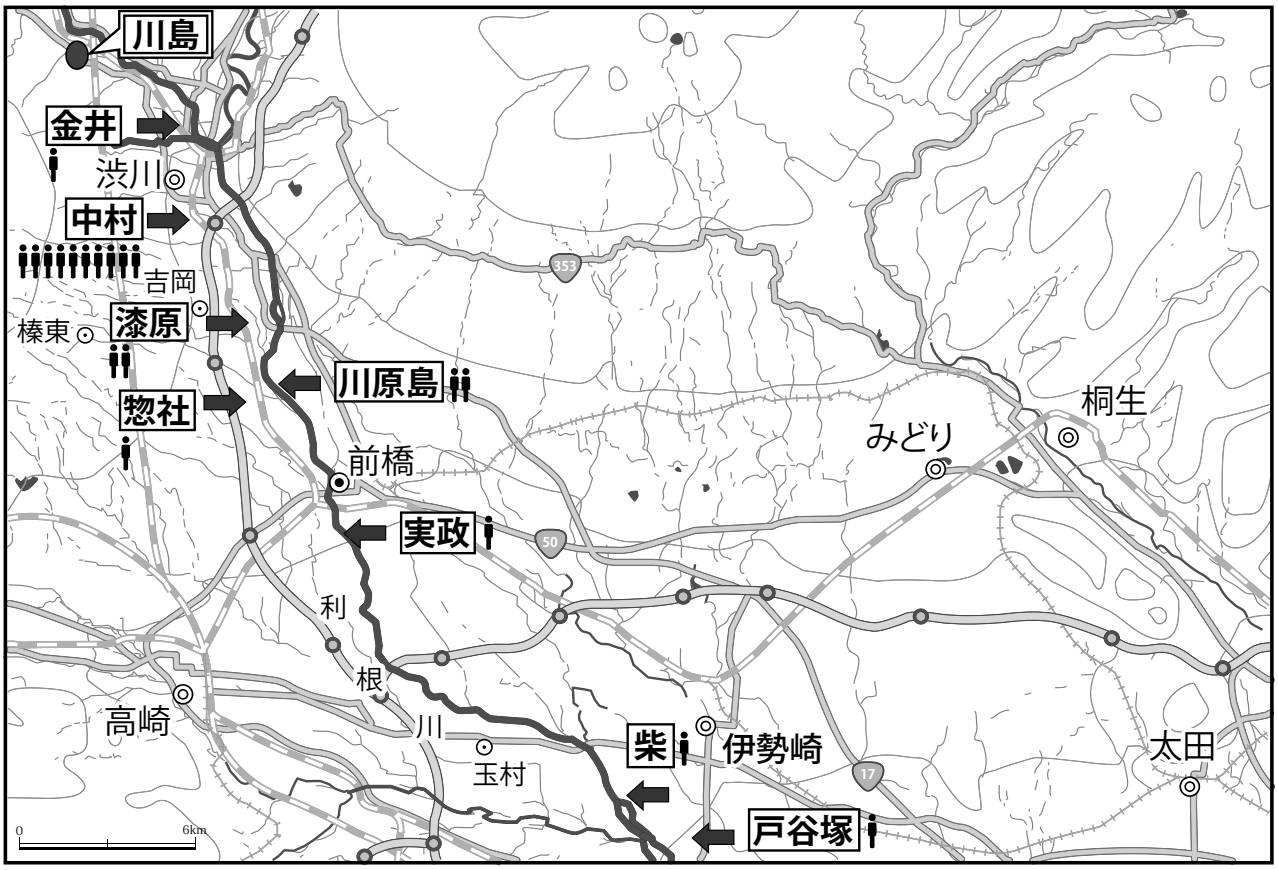

図　川島村の人が救出された場所と人数

救助した側の記録はあまり残されていないが、「見分覚書」には漆原村（現北群馬郡吉岡町）の項に「川島村十兵衛の娘、泥の中より引き上げ養育いたし、右村方へ引渡し候由」とあり、⑮の「ひやく」が助けられたことが記されている。また、確実に川島村の被災者とは断定できないものの「天明年中大変集」（注10）には「戸谷塚村にて男壱人あけ、尚中町藤後と申す者十八九年になる女壱人上げ、この女西上州川島村の者にて候」とあり、戸谷塚で助けられたのは⑪寅松、中町で助けられた女性が③のくにである可能性がある。「秋の友（抄）」（注11）には「れいせん河原にて四十八才之男を助け候由。杢辺之川嶋村の者に候」とあり、⑱藤右衛門の可能性がある。

最も多くの人が救出された中村でどのように救出が行われたかを示す資料は今のところ見つかっていないが、中村の状況は「見分覚書」に下記のとおり記載されている。

松平大和守領分
上州群馬郡中村
高三百拾七石余
内二百四拾五石余泥砂火石入荒
人別四百拾八人
内弐拾人流死
馬三疋　流死
萩原鐵太郎知行所
同国同郡
高弐拾弐石余
内七斗余　泥砂火石入荒
家数六軒
内四軒流失
此村方利根川附三国往来ニ候所、泥押の砌川附の家居不残流失。寺壱ヶ所流失。百姓藤兵衛家村中ニ有之候処、丈夫成家作二階附にて流留り、二階下迄泥埋ニ相成、右家ニて男女六拾人余、馬三疋二階の中ニて（ママ）相助候由村役人共申之候

中村は榛名山西斜面が末端部が緩やかな傾斜で利根川までひろがる地域に位置し、川越藩と旗本萩原鐵太郎の相給の村であった。「見分覚書」の藤兵衛家の二階で多く

⑨同人弟　忠右衛門　年四十六
　是ハ右同断
⑩同人子　松次郎　年廿才
　是ハ同郡中村ニ而あがり、渋川村磯五郎世話ニ而相助り申候
⑪百姓　源六　寅松　三十五
　是ハ同郡那波郡戸谷塚村にてあがり同村彦左衛門世話ニ而助申候
⑫百姓　九兵衛女子げん　年十七
　是ハ同郡中村ニ而あがり
⑬百姓　伊平衛母はつ　五十三
　是ハ同郡中村ニ而あがり
⑭百姓　源兵衛妻なつ　四十才
　是ハ同郡漆原村ニ而あがり、同村庄治郎世話ニ而助り申候
⑮名主　十兵衛女子ひやく　廿四才
　是ハ同郡漆原村ニ而あがり、同村玄治郎世話ニ而助申候
⑯百姓　治助妻はつ　五十才
　是ハ同郡中村ニ而あがり、同村文蔵世話ニ而助申候
⑰百姓　りん　六十六才
　是ハ同郡中村ニ而あがり、同村源八世話ニ而相助り申候
⑱同人内藤右衛門　四十八才
　是ハ同郡実政村ニ而あがり前橋田新町久八世話ニ而相助申候
⑲百姓　藤左衛門子義七　弐十七才
　是ハ同郡金井村ニ而あがり、同村平六世話ニ而相助申候

〆拾九人　男拾壱人
　女八人

右は御尋ニ付書面之書上ケ申候所相違無御座候已上

天明三年卯九月
　上州群馬郡川嶋村
　　名主　清左衛門
　　組頭　孫兵衛
　　百姓代　甚五兵衛

二、「見分覚書」と「相助り人別帳」の記載内容

双方の記録とも一九人の生存者が記されており、「相助り人別帳」の⑥「庄左衛門」が「見分覚書」では「庄兵衛」、⑦安兵衛が「見分覚書」では百姓、⑰「百姓　りん」が「見分覚書」では「りん」、⑱藤右衛門が「見分覚書」では百姓と記載されているなど何点か記載が異なる点はあるものの年齢・性別はすべて一致し、救出された場所も異なる点はない。「相助り人別帳」は救出地点で誰の世話になったか記載されているものが多いが、「見分覚書」ではそのような記載は見られない。また、救出された人の年齢や性別に顕著な偏りは見られない。

根岸が見分のために江戸を出発したのは旧暦七月八日の泥流発生から二ヶ月近く経過した八月二八日である、「相助り人別帳」には「右は御尋ニ付書面之書上ケ申候所相違無御座候已上　天明三年卯九月」とあることから、川島村に見分に入るにあたり根岸から報告を求められた名主が作成したのが「相助り人別帳」、それに基づいて救出された人を救出地点別に整理したのが根岸の「見分覚書」と考えられる。

なお、「見分覚書」には川島村の被害状況も記されているが、村高六八六石余の内約七割にあたる四八六石が泥流で被災し、一一三人が流死し、民家も一六八軒中、七割以上の一二七軒が流失するという吾妻川下流域で最大の被害を受けた村である。これだけ大きな被害がでたのは、同村手前の左岸側で岩場が張り出し、同村は右岸のゆるやかな傾斜の河岸段丘面に位置し、さらに吾妻方面に向かう街道が吾妻川に沿い、その街道の周辺に民家があったためだと考えられる。この災害後道路は山側に付け替えられ、集落も川から離れたところに移転している（注9）。

三、川島村流失者が救出された場所

川島村から泥流に流された人たちはどこで救出されたのであろうか。前出の二つの資料にもとづいて救出された地点を地図に示すと図のとおりである。最も多くの人が救助されたのは川島村から約一〇㎞下流の中村（現渋川市中村）で一〇名、最も遠方で救助されたのは四〇㎞近く下流の戸谷塚村（現伊勢崎市）である。

原田清右衛門御代官所
同国同郡（上野国群馬郡）
高六百八拾六石余
内四百八十六石余が泥砂火石入荒、
人別七百六十六人
内百十三人流死
家百六十八軒
内百二十七軒流失
馬百壱疋
内弐拾八疋流失

此村方吾妻川附ニ候処、泥押の砌一村過半流失。天台宗宝昌寺本堂庫裡諸堂流失。其外御林壱ヶ所不残流失。泥押之節相流レ候者之内、百姓武七歳四十五、同人倅伊八歳十一才、百姓半兵衛娘ふき歳廿四才、百姓善右衛門歳五十五才、同人弟忠右衛門歳四十六才、同人倅松次郎歳廿才、百姓九兵衛娘けん歳十七才、百姓伊兵衛母はつ歳五十三才、百姓治助妻はつ歳五十才、りん歳六十六才、川路三里程下利根川の内松平大和守領分中村ニて取上ケ、百姓九兵衛妻くに歳十九才、川路八里余下同川の内酒井駿河守領分柴中町ニて取上ケ、百姓半兵衛歳五十四才、百姓庄兵衛歳三十六才、川路四里余下同川の内松平大和守領分川原嶋村ニて取揚、百姓安兵衛年五十三才、同川通六里程下松平大和守領分惣社村ニて取上ケ、百姓源六倅寅松年三十五才、川路九里程下同川の内遠藤平右衛門御代官所戸谷塚ニて取上ケ、百姓源兵衛妻なつ歳四十才、名主十兵衛娘ひゃく年廿四才、同川通六里余下松平大和守領分漆原村ニて取上、百姓藤右衛門年四十八才、川路六里余下同川内松平大和守領分実正村ニて取上、百姓藤左衛門倅儀七年廿七才、一里余下吾妻川通の内辻六郎左衛門御代官所金井村ニて取上、夫々え相送り候旨村役人共申之候。（注7）、（注8）

（2）「天明三年　流人相助り人別帳」

本資料は川島村で名主を務めた個人宅に伝わったもので、近年、渋川市教育委会が散逸直前にレスキューした資料群に含まれていたものである。この時収集した資料群は現在渋川市北橘資料館で保管され、整理が進められている。横冊で表紙背表紙を含めて四紙からなり、救助された全員の名前・年齢・性別、救助された場所のほか多くの救出者が誰に救出され世話をうけたかが記されている。

他の被災村で救出された人の人別帳が作成され残っている例は現段階では例がなく、本資料はたいへん稀少なものである。

「相助り人別帳」に記載された内容は次のとおりである。

表題
天明三年
流人相助り人別帳
卯九月　上州群馬郡
川嶋村

①百姓　武七　年四十五才（〇数字は説明のため筆者が記入）
是ハ同郡中村ニ而揚り、同村千厳院世話ニ而相助り申候
②同人子　伊八　年十一
是ハ右同断
③百姓　九郎兵衛妻くに　年十九
是ハ同国那波郡芝中町名主藤吾世話ニ而相助り申候
④百姓　半兵衛　年五十四
是ハ同郡川原嶋丹七世話ニ而相助り申候
⑤同人女子　ふき　年廿四
是ハ同郡中村ニ而あがり、石原村清兵衛世話ニ而相助り申候
⑥百姓　庄左衛門　年三十六
是ハ同郡川原嶋伊左衛門世話ニ而相助申候
⑦安兵衛　年五十三
是ハ同郡惣社町あかり、同村要七世話ニ而相助り申候
⑧百姓　善右衛門　年五十五
是ハ同郡中村ニ而あがり、石原村半七世話ニ而相助申候

天明泥流から救出された人々（一）

―上野国群馬郡川島村を例に―

古澤勝幸

はじめに

天明三年（一七八三）七月八日（旧暦）に浅間山の噴火によって発生した鎌原土石なだれ・天明泥流（注1）では一五二三人の尊い人命が奪われ、二〇六五軒が被災した。（注2）この災害については多くの記録が残され、代表的なものは萩原進によって「浅間山天明噴火史料集成Ⅰ～Ⅴ」（注3）にまとめられている。この史料集成には泥流に流されつつも立木にしがみついて難を逃れた人や、下流の川沿いの村での生々しい救助活動の様子を記したもの、なかには行徳や銚子まで流された人が生還したことが書かれた古記録が二〇点近くも収録されている。ここに収録されたもの以外にも救出に関する資料は残っていると思われるが、これまで被災者の救出に関する研究はあまり注目されてこなかった。

本来の研究のあり方としては、救出に関する資料や救出された人や場所の全体像をとりまとめ、その中で一件ごとの状況について深めていくべきである。しかし、古記録等の記載内容には精査が必要なものが多い。そこで本稿では、泥流被災者救済に関する調査研究の第一歩として、古記録の中で正確な内容が記されていると考えられる勘定吟味役根岸九郎左衛門が記した「浅間山焼に付見分覚書」（以下「見分覚書」）（注4）と、近年所在が明らかになった川島村名主文書の「天明三年　流人相助り人別帳」（以下「相助り人別帳」）（注5）の二点の資料をもとに、川島村で被災し被災者された人々について紹介したい。

一、川島村の概要と救出記録

川島村は明治二二年（一八八九）の合併で阿久津、祖母島、金井、川島、南牧の村が合併し金島村となり、昭和二九年（一九五四）渋川市に合併、現在は渋川市川島となっている。

渋川市北部、榛名山の北西面のすそ野の末端部が吾妻川に入り込む部分に位置する。上越新幹線が東京方面から榛名トンネルをぬけ、吾妻川をわたる際の橋梁の西側にあたる吾妻川右岸の地域であり、橋梁のほぼ直下の畑には泥流によって運ばれここに残された幅一五ｍ高さ四ｍもの大きさの溶岩塊「金島の浅間石」（群馬県指定天然記念物）が保存されている。吾妻川下流部では最も大きな被害を受けた村である。一九九八年には旧川島村内の「川島久保内・馬場遺跡」の発掘調査が行われ（注6）で天明泥流に被災した式内社甲波宿禰神社の礎石等が出土したことが報告されている。

川島村で泥流に流され救出した人のことを記した「見分覚書」と「相助り人別帳」の概要および記載内容は以下の通りである。

（1）浅間山焼に付見分覚書

この記録は幕府の見分役として被災地の調査・復興を主導した幕府勘定吟味役根岸九郎左衛門が記したものであり、浅間山天明噴火に関する幕府側の唯一の記録である。吾妻川南縁（右岸）の吾妻郡大笹村から群馬郡阿久津村、吾妻川（左岸）大前村から群馬郡白井村、利根川南縁（右岸）群馬郡渋川村から榛澤群中瀬村、利根川北縁（左岸）勢多郡上大崎村～新田郡平塚村の被害田畑、家屋、流死人、流死馬等が記され、このほか、降灰被災地である碓氷郡坂本宿、信州佐久郡軽井沢宿、同沓掛宿の被害状況や廻村中に村々で見聞した事柄が記されている。このうち、川島村（現渋川市川島）、北牧村（渋川市北牧）には救助された村民全員の名前・年齢・性別をはじめ、いくつかの村での救助の様子が書かれている。

「見分覚書」の川島村の記載内容を抜粋すると次の通りである。